

高尾山学園 全国各地に広がった「八王子発」の取り組み その2

高尾山学園は、様々な理由で学校に通うことができない不登校の子どもたちのための全国初の小中一貫校として、平成16年4月に開校しました。当時、不登校は社会問題となっていました。特別な教育課程は整備されておらず、不登校の子どもたちの居場所はフリースクールなど「学校の外」に限られた状況でした。

「学校へ通うことができなくなった子どもたちに、学校を卒業させてあげたい」という想いを発端に開校に向けたプロジェクトが始動し、後に国の「構造改革特区」第1号として認定を受け、市が全国に先駆けて不登校特別校を開校しました。

「なぜ学校へ行けない子どものために、わざわざ学校をつくるのか」。当時は批判の声もありましたが、子どもの個性に合わせて選べる学校での過ごし方が数多く用意されたこの場所は、自分の居場所を見つけたり、存在意義を感じられたりするだけでなく、様々な体験を通じて未来に続く自分の新しいみちを見つけられる、大切な役割を担っています。

この取り組みが国を動かして制度化され、今では全国に不登校特別校が開校されています。



八王子 × 200 ÷ 日本

八王子 × 20 ÷ 東京

八王子は、理想的な実験フィールド。

八王子発の施策を2つ紹介しましたが、こうした新たなみちをつくる「都市実験」を行う場として、八王子が適していることを知っていますか？

その理由は、

- ・ およそ日本の 1/200、東京都の 1/20 という人口規模であること
- ・ 赤ちゃんから学生、働き盛り、高齢者に至るまで、様々な世代がバランスよく住んでいること
- ・ 地形的にも海以外の要素がそろっていること
- ・ サル山からトレンドイードラマの舞台まで、都市の形態もバラエティーに富んでいること

これらの要因によって、偏りの少ない、十分な母数のデータを取ることができるのです。

つまり、八王子で上手くいった取り組みは、ほかの都市でも水平展開できるということ。新たなチャレンジを考えている企業に対しても、「新しいことをやるなら、まず八王子をフィールドにしてみませんか？」と自信をもってPRしていきましょう。

中核市ならではの スピード感とやりがいを実感

介護施設の指定に関する事務を担当していますが、中核市になって格段に、利用者の声を受け止め、対応できるスピードが早くなったと感じています。

これまで指定事務や指導監督を担っていた東京都は、限られた人数で区市町村にある事業者を指導・監督していたため、利用者からも施設からも顔の見えない遠い存在でした。

中核市への移行により、利用者の家族からの相談で基準違反や虐待が疑われる場合には、すぐに聞き取りや現地調査ができるようになりました。施設と利用者にとって身近な市だからこそ、それぞれの言い分を聞きながら、市民にとってベストなサービスを提供していけるようになりました。

また、地域の介護サービスを整備していく上で、需要と供給バランスを調整できる指定の権限が移譲されたことは、大きなアドバンテージです。これによって、描いたシナリオに合わせたサービスが提供されるよう、事業者を誘導していく道が開けました。

新型コロナウイルスへの対応でも、一斉休校の決定により子育て中の施設職員が出勤できず、定められた職員数に届かないとの報告が入りました。

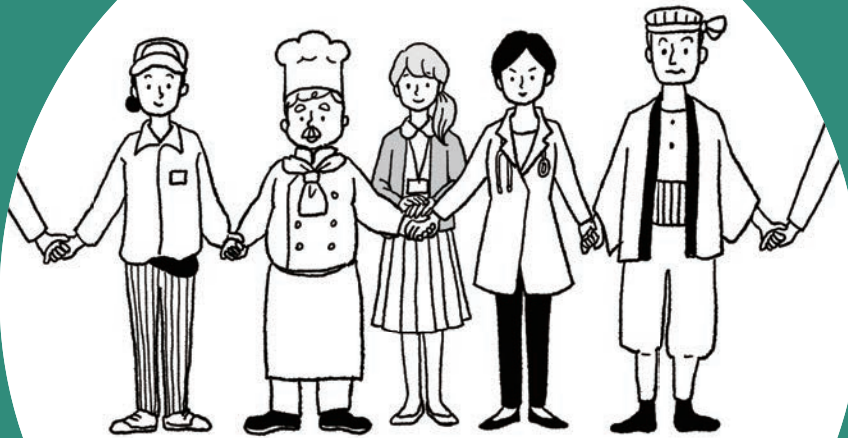
上司が弾力的な対応を判断し、休業を認める通知を出したところ、「国よりも早く対応してくれた」と施設からお褒めの言葉をいただきました。

国は後追いで、八王子市と同じ対応をしました。指定権者である権限と合わせて、実態をよく知ることが、よりよい仕事へとつながるのだと思いました。

なりたちや基準や制度を知らないとどこまでやっていいのかわからず、知識のインプットが大変ですが、中核市八王子ならではのやりがいを感じています。

(30代 事務職)





それぞれの「みち」を

つなぐ

職員1人あたりの人口の多さは、都内1位の八王子市。[※]
ニュータウン、大学、商業・工業エリアや田園地帯までそろっていて、
課題の多様性もトップクラス。

だからこそ「行政がまちの課題を解決する」という発想ではなく、
豊かな地域資源を
「見つけて、育てて、つなげていく」力が求められます。

小田野中央公園 「場所」と「人」・「人」と「人」をつなぐ

季節の花やイベントが暮らしを彩る、恩方地区にある「小田野中央公園」。

地域住民に愛されるこの公園は、もとは不法投棄が問題となっていた場所でした。「市の職員と市民で、公園をつくろう」と、地元の町会長に相談したところ、地域の方々や近くの福祉施設、小学校も参加し、「小田野中央公園をつくる会」が結成されました。

そこから4年の歳月をかけ、「つくる過程を大事にしよう」を合言葉に、遊具・桜並木などの4グループのワークショップが、土日も含めて100回開催されました。もちろん職員も参加です。「河津桜を植えたい」という住民意見があれば視察に行き、桜守からノウハウを聞き、「丸太の遊具がほしい」という子どもたちの意見を取り入れたり。様々な声をもとに計画をつくり、みんなの公園をつくりあげていきました。

地域資源同士を結び付けて 化学反応を引き起こす「触媒」となる。

完成した公園には、子どもの提案による亀の形の日時計がシンボルとして置かれ、川沿いに植えた河津桜の並木は、15年たった今では、お花見を楽しめるまで大きくなりました。春は、藤棚も見頃になります。

その後、「つくる会」は「小田野中央公園まちづくりの会」と名前を変え、新たなメンバーを加えながら今に至るまで、清掃・花壇の花植え・駐車場の管理など、ほとんどの公園の維持管理を住民主体で行っています。

「場所」と「人」をつなぐことで実現した、末永く愛される公園。これにより、住民同士の輪も大きくなりました。熱意と夢をもって市民を口説き、「地域にある潜在的な力」を引き出してつなげることも、私たち職員に求められる大切なスキルです。



詳しくは、「まちづくり研究はちおうじ Vol.7」

はちおうじ未来塾 次の世代へと、バトンをつなぐ。

日本の企業数の99.7%、雇用の70%を占める中小企業。
高齢社会の中、歳を重ねた創業者たちの悩みは、後継者への事業継承です。

そこで、市内中小企業の後継者育成のために、平成19年にスタートしたのが「はちおうじ未来塾」。
成功や失敗を経験した経営者の話や、業種を越えた参加者同士の議論を通じて「経営者としてどう考え、行動すればよいか」という「経営者マインド」を学んでいます。

この塾のユニークなところは、「塾の卒業生が、次代の塾の運営に協力する仕組み」。
発足当初は、市や商工会議所、サイバーシルクロード八王子の職員で構成する事務局が主体となり、
経験豊富な元経営者とともに運営していました。しかし、「人材育成は、続けないと効果が表れない。
八王子で息長く続いていく取り組みにしよう」と、事務局が卒業生に声をかけたことをきっかけに、
運営方法を転換。未来塾の卒業生で組織する「HFA(Hachioji Future Association)」が
中心となり、現役のときに感じた様々な思いを活かしながら、講師の選定から塾生のフォローまでを
行い、今では事務局とともに、未来塾を共創する存在として関わっています。

つなげるだけじゃない。
つなげたものが、
自力であるきだすまで支えるのが、仕事。

この取り組みは、社員と地域を幸せにするために経営に奮闘する後継者を、ときに同志のように励まし、背中を押していく「バトン」を、次の世代にも手渡していくこと。

ひとつづくりには手間と時間がかかりますが、出合いの「場」をつくれるのは、地域を知る私たち職員。
そして、やりっぱなしにせず、その後に続く仕組みをつくれるかどうか、私たちの想いとスキルにかかっています。

まちづくりの主体は、あくまでも市民。私たちがまちを支えていく人材を結び付け、エールを贈ることで、さらにその人材が次の世代にエネルギーをチャージしていくことができると、八王子が最高のまちになりますね。



Q「八王子市役所に勤めてるの？ じゃあ〇〇さん知ってるよね？」

こんな質問をされて困った経験は、誰も一度はあるのではないのでしょうか。

3,000人が働く大きな組織だから、会ったことのない人も当然いますよね。
心一つにするのは、ほかの市よりも大変かもしれません。

でも、ここはポジティブに、まだ出会っていないキーマンを知り、
新しいつながりを持つ「チャンス」だと考えてみてはどうでしょうか。

法務に詳しい人、顔が広い人、システムに強い人、現場を知り尽くした人…
まちの中の力をつなぐのと同じように、いろんな職員の強みと強みをかけあわせ、
「あなたのみちを、あるけるまち。」をつくっていきましょう。

市民のしあわせに向けて 職員同士の「みち」をつなげていこう。

職員アンケートから：八王子で働く醍醐味

職員 3,000 人の力。

職員同士課題解決に向け、同じ方向を向いてチーム戦で奮闘している時は、
ドキドキ・ハラハラ・ワクワクです。 (50代 事務)

みんな違う考えや知識を持っている人々が、熱意をもってひとつのことに
取り組んでいる状況にやりがいを感じる。 (30代 事務)

困ったら助けを求める！必ず誰かが助けてくれるという確信をもっています。
仕事でも周りの方にいつも助けてもらっています。 (50代 専門職)



いっしょに「みち」を

あるく

八王子市の職員は、市民にとって「相談にのってもらえる専門家」。

一人ひとりがその自覚を持ち、

市民みなさんがあるきたい「みち」を見定め、
ときには寄り添って、手を携えて一緒にあるく。

そんな「伴走者」としての役割も期待されています。

市民対応 一期一会を大切に

毎日、電話や窓口寄せられる市民からの相談の数々。職員からみれば、そうした市民への対応はルーティンワークの一つになりがちです。

しかし、市民にとっては「そのとき」に対応してくれた「そのひと」が唯一の相手であり、その対応が市役所や八王子そのもののイメージを決めてしまうことさえあります。相手の言葉を真摯に受け止め、相手の立場に立ち、相手の希望に少しでも近づけるように一緒に解決の糸口を見つけていく。そんな一人ひとりのみち、あるき方と真剣に向き合う瞬間を大切にしたいものです。



自分のファンになってくれるような対応をしよう。
そうすれば、その市民はきっと
「八王子のファン」になってくれる。

私は以前、サービス関係の仕事でお客様満足度を調査する部署にいましたので、市の職員の皆様の御苦労も多少はわかるつもりです。

今日、家族の遺産や相続に関する相談で、暮らしの安全安心課[※]に電話しました。そこで対応してくれたAさんという男性職員の方が素晴らしかったので、是非、感謝の思いをお伝えしたいと思ってお電話しました。

「市民の声」から…



Aさんは大変豊富な知識をお持ちで、こちらの疑問に対して本当に詳しく、親切に教えてくださいました。これまで役所の人と言えば、いばる人が多いような印象でしたので非常に驚きました。いわゆる大企業のカスタマーサービスに勝るとも劣らない仕事ぶりだと思います。

※現在の市民生活課